



講演録

仙北 富志和

黒澤西蔵翁

生誕一三〇年・遺訓を聴く

〳健士と健民〳に

虹を架けた農思想

— 黒澤西蔵翁生誕 130 年・遺訓を聴く —

国家の興隆・思想と国土  
国敗れて山河あり

一般社団法人

北海道地域農業研究所 主催

# 平成二七年度通常総会 特別講演

・日時 平成二七年五月二八日

・場所 札幌市 北農ビル一九階

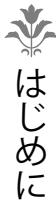
・共催 学校法人 酪農学園

# 講演録

黒澤酉蔵翁 — 生誕一三〇年

“健土と健民” に虹を架けた農思想

学校法人酪農学園 学園長 仙北 富志和



## はじめに

皆さんこんにちは。久しぶりに人前に出ましたので、うまく話ができるかどうか、自信はありませんが、頑張りますのでよろしくお願いいたします。

今日は、このような立派な席を設けていただき、誠にありがとうございます。私は、例の福島原発事故を境にして、国土の尊厳といえますか、国土の汚染ということが改めて気になるようになりました。一般の国民も、国土の汚染、農地の汚染というものがこれで



いいのか、ということについて強い関心を持ち始めました。

去年（二〇一四年）のちょうど今頃、私も酪農学園の建学の精神であります「健土健民」、黒澤西蔵翁が八〇年前に唱えたこの哲学を、もう一度整理してみようと思い立ちました。今年、西蔵翁の、生誕一三〇年であることにも気が付きました。

そして、まとまった本として完成が近くなったときに、今年、国連の国際土壌年であることもわかり、さらにタイミングが良くなりました。西蔵翁が「何かやれ、しっかりせい」と天国から言われたのかな、という気がしております。

西蔵翁の誕生日が三月二八日であり、それに間に合うように出版いたしました。古い講演録などは、いろいろなところに散らばっておりますので、それを整理して、皆さん方の目にもう一度触れてもらってはどうか、と思ったのが動機でございます。

そういう動機と、学園の麻田理事長からは是非にと言われまして、地域農研さんのお力を借りたということです。ありがとうございました。

さてそこで、西蔵翁の想いや信念を、皆さん方にどう伝えたいのかを考えましたが、私なりに整理した順番でお役目を果たしたいと思っております。



## 黒澤西蔵翁の主な足跡

### ① 渡道から酪農入門

最初に西蔵翁とはどういう人なのか、名前は知っているけれども殆ど知らないという方々もおられると思いますので、足跡をごく簡単に紹介します。別表に西蔵翁の足跡の概要をまとめています。

西蔵翁は、明治一八年に茨城県の現在の常陸太田市でお生まれになっています。生い立ちからしますと、比較的裕福な家柄であったようですが、父親が酒を飲み過ぎて財をなくしたことから、勉強したいけれどもなかなかできなかったわけです。母親の理解・了承を得まして、東京に出て勉学をすることができました。

時あたかも明治三四年、田中正造の明治天皇への直訴事件が起こります。直訴事件そのものは明治天皇が知らない間に、馬車は通過してしまったのですが、新聞が大々的に取り

## 黒澤酉蔵翁の主な足跡

年 次	事 柄
<出生から渡道>	
1885 (明治18)	茨城県世矢村生まれ (現常陸太田市)
1900 (同 33)	東京の神田数学院・正則英語学校で苦学
1901 (同 34)	田中正造の明治天皇への直訴後、足尾鉾毒被害民救済運動に挺身
1905 (同 38)	母の死を機に渡道を決意、宇都宮牧場の牧夫見習い
1909 (同 42)	キリスト教の洗礼、酪農家として独立
1982 (昭和57)	2月7日永眠
<教育活動>	
1933 (昭和 8)	北海道酪農義塾創設
1942 (同 17)	野幌機農学校設立
1948 (同 23)	野幌高等酪農学校 (通信教育) 設立 北海道酪農青年研究連盟の設立を後援 (現日本酪農青年研究連盟)
1949 (同 24)	酪農学園大学部設立
1950 (同 25)	酪農学園短期大学設立
1954 (同 29)	北海道農業教育振興会会長
1957 (同 32)	(財)酪農育英会設立
1958 (同 33)	三愛女子高等学校設立
1960 (同 35)	酪農学園大学設立
1971 (同 46)	「田中正造全集」の出版決意
<産業活動>	
1925 (大正14)	全道の酪農民を対象にした北海道製酪販売組合を創立 (酪連に改組)
1926 (同 15)	農業組合中央会道支会長 (現北農中央会)
1940 (昭和15)	北海道興農公社社長
1950 (同 25)	(株)雪印乳業相談役
1960 (同 35)	北海タイムス社社長
<政治活動>	
1924 (大正13)	道議会議員
1942 (昭和17)	衆議院議員
1945 (同 20)	日本協同党を結成、代表世話人
1946 (同 21)	公職追放
1950 (同 25)	公職追放解除
1951 (同 26)	道知事選に立候補、落選 (以後、直接的な政治活動を断つ)
<北海道開発活動>	
1923 (大正12)	北海道畜牛研究会をつくりデンマーク農業を紹介
1924 (同 13)	第2期拓殖計画を主導 (牛馬100万頭計画)
1934 (昭和 9)	北海道農業革新期成会を結成
1945 (同 20)	戦災者北海道集団疎開100万人案を建言
1954 (同 29)	北海道開発審議会会長 (8期16年)

### 黒澤酉蔵翁…生存者叙勲の受章

- 1964年 勲3等旭日中綬章 (酪農振興に尽力 79歳)  
 1970年 勲2等旭日重光章 (北海道開発の推進 85歳)  
 1981年 勲1等瑞宝章 (北海道開発の父・酪農学園の創立 96歳)

上げた。

それを知った黒澤青年が、五、六日後に、宿に泊まっている田中正造を訪ねて、その顛末を聞いた。そして内村鑑三を団長とした足尾銅山の視察団（約一〇〇〇名）が出るというので、田中正造が黒澤青年に「それについて行って、現地を見たらどうですか」という話をされた。

そこで西蔵翁は、友達と共に一週間にわたって、現地をつぶさに見た。それで、これは大変なことだとの想いに至り、学業どころではないと、勉学を投げ捨てて田中正造の鞆を持った。「小田中」と言われるほど果敢な行動に出て、牢屋に六か月間入るといふ経験もしました。

その後、田中正造の勧めもあり、復学して無事中学を卒業しますが、ちょうど人生、これからどうしようか、と想っている時に、母親が亡くなってしまいます。社会運動もいけれども、自分の身内の面倒、弟や妹の面倒もみられないで、社会運動とはいかがなものか、との疑問にかられ、西蔵翁の言い方を借りると、アメリカに行くか北海道に行くか迷ったが、お金もないので北海道に行くことにした。こういう話を聞いたことがあります。

北海道に渡り、室蘭から札幌に出まして、北海タイムズの社長阿部宇之八に就職をお願

いたした。阿部社長は、その後札幌区長、今の市長になった人ですが、この人の紹介で、当時白石村菊水にあった宇都宮牧場が紹介され、宇都宮仙太郎という酪農の先達に巡り会うことになります。

宇都宮仙太郎が言った有名な「酪農三徳（得）」という言葉があります。酪農には三つの良いところがある。酪農という言葉はまだ使われてはいませんが、「牛飼いの商売には三つのいいところがある。一つは役人に頭を下げなくてもよい」、憲兵にしこたま睨まれて、もう役人にはこりごりだったので、これが大変気に入ったという話を聞いたことがあります。

「二つ目は嘘をつかなくてもいい」、牛を相手に嘘をついて何になる。「三つ目は牛飼いの商売は、人々を健康にする基を生産する素晴らしい仕事である」、と言われて、すっかり気に入り、翌日から牧夫見習いとして住み込むことになります。

牧夫見習いといっても、乳搾り、手搾りはさせてもらえず、黒澤青年は牛舎の前の木に乳頭を真綿で作ったものや小大根を、紐でぶら下げて乳搾りの練習をした、という有名な逸話が残っています。

宇都宮仙太郎は、これは大変な男だと見込んだといわれています。その後、キリスト教



の洗礼もうけていますが、九六歳で永眠されました。

## ② 教育活動

次は教育活動ですが、日本の農業を發展させていくためには、教育を置いて他に途はない、との想いに至り、いろいろな周りの人の反対や心配を押し切つて、八二年前に今の苗穂のサツポロビールの近くに、酪農義塾を創りました。それが教育活動の始まりです。

昭和の初めの世界恐慌、経済不況で農村が大変惨めな目にあつていました。政府も魂のしつかりした農民を教育するということが、地域や県によつてまちまちですが、農民道場や修練農場、北海道は拓殖農場など、そういうものを全国に創らせました。

西蔵翁は、そういう国の政策の動きをも見ながら、国の制約なり、何なりは一切受けない、自分独自の教育理念に基づいて酪農民を教育するとの想いで塾を創つたのが、今日の酪農学園の基であります。

その後、現在の文京台に移転するわけですが、授業料は取らない、全寮制で食費も取らず、組合のお金を少しいただきながら、働いて自前で生活・自立できる農民を創り上げるという信念で運営しました。

戦争が終わって、しばらくまで授業料も食費も取らない学校でした。しかし、貯めていたお金がインフレでパーになってしまいましたので、やむを得ず食費を取る、その後授業料も取ることになりました。

デンマークの復興が、農村青年の教育によってなされたという強い想いがありましたので、デンマークを見習った教育をしたいというのが、酉蔵翁が教育に取り組んだ動機であります。

### ③ 産業活動

産業活動につきましては、酪農は牛一頭から自立していきませんが、規模はだんだん拡大していきます。

大正一二年に関東大震災が起こります。大規模な地震で四〇万戸が火事で燃えてしまい、一〇万人以上の死者・行方不明者を出した大惨事でありました。世界中から救援物資が日本に送られ、その中に大量の乳製品が入っていました。

政府も食料不足を心配しまして、輸入食品の関税を一時撤廃するという措置をとりました。このため、乳業メーカーが国内の生乳は買わない、原料乳は要らないという不買問題

が起こり、酪農家は毎日搾った牛乳をドブに捨てる、川に捨てるということになってしまった。

これは大変なことだと、西蔵翁たちは、この苦難の出来事を逆利用して何かプラスになる方向転換が出来ないか、農民の苦しみを自らの手で解決するのだ、ということで北海道製酪販売組合という組合組織を創りました。

酪農家も貧乏であったため、なけなしの資金を出し、それに参加してやっところぎ着けたというのが組合運動の始まりです。しかし、酪農民単独の組合は産業組合として認められない、との道庁の判断もあり、他の農協を巻き込んだ連合会に切り替えて、「酪連」、製酪販売組合連合会に改組しました。

何を目的にしたかという点、一元集荷制度であります。最近この制度から抜けるとか、抜けないとか、という問題があちこちで出てきています。酪農民個人個人がめいめいに乳業メーカーに生乳を売って、不安定な価格、不安定な流通に陥ったらだめだということによって一元管理をする。

そして希望するメーカーに多元的に販売する。現在も生きている基を創ったわけですから、酪連自らがバターなどの乳製品の製造・流通に取り組み、利益を酪農民に配当す

るといふ事業展開です。

酪連はその後、公社になり、そして株式会社になり、戦後、経済力集中排除法によって、分割を余儀なくされ、昭和二五年に雪印乳業が誕生する。こういう経緯をたどる中心的な役割を、西蔵翁が果たしてきたということです。

#### ④ 政治活動

政治活動ですが、これは札幌市会議員や道議会議員を経験しながら、戦争が近づく時に大政翼賛会の北海道代表になって、国会に行くわけです。まもなく衆議院の選挙があり、ものの本によりますと、西蔵翁は告示の前日まで推薦を断ったと書かれています。たぶん、政治家になるのは、必ずしも自分の本意ではなかったのだろうとも思われます。

血気盛りの昭和一九年ごろ、国会の農林委員会での質問を、凄まじい面構えで行なっている写真が保存されています。

衆議院議員をやりながら、戦争が終わりますが、日本協同党という政党を結成します。これは、戦争に敗れた日本が復興して再生するためには、デンマークの協同組合主義を参考にして、協同組合の精神を国民みんなが持って、事に処さなければ日本の復興はない、

という想いで日本協同党を結成しました。

食糧事情混迷のなか、農林大臣への就任も要請されています。公職追放中で衆議院議員選挙には出られなかつたのですが、北海道・長野県を中心に多くの国会議員を生んだという経緯がございます。

公職追放解除後、吉田茂首相からの強い勧めで北海道知事選挙に出ることになります。酉蔵翁は追放が解除されてから、「自分はこれから何をやるか」を考えました。明治の末から今まで、デンマークに追いつくことを提唱し、北海道を日本のデンマークにするという想いでやってきたけれども、残念ながら自分はまだ行つたことがない。ということでヨーロッパ・アメリカの視察旅行に出ます。

約二か月間、デンマーク・ドイツ・オランダ・イギリス・アメリカを見て回っている最中に、吉田首相が



国会で論陣を張る酉蔵翁（1944年）

ら早く帰って来て知事選挙に出てくれ、と言われ渋々急いで帰ってきたということです。

記録を見ますと、告示の二週間か、一〇日ぐらい前に帰ってきています。それから選挙を戦いましたが、選挙を手伝った私の親戚もおりました。デンマークかぶれで、行く先々でデンマークの話ばかりするので、農村部の人はいいけれども、都市部の人はピンとこなかったのではないか、という話を聞いたことがあります。

当時は労働組合運動の強い時代の田中敏文知事であり、力及ばずでした。九二万票対七八万票の大接戦という記録が残されています。

その前後に、これも有名な政策ですけども、緊急入植政策をやりました。北海道にも、戦後引き揚げて来た人たちが、あちこちに入植・開墾・開拓に入った。野幌にも世田谷部落というのがありますが、これは東京の戦災に遭った人たちが来た場所です。

この引揚者、戦災者の緊急入植事業によって食糧の増産、北海道の開発、戦争勢力の巻き返しも含めて、こう



いう提案をした経緯がありますけれども、これは非常に苦しい目に遭わせてしまい申し訳なかつた、と回顧しています。

昭和二九年から一六年間にわたり、北海道開発審議会の会長をやりました。これは自ら筆を執つて、政府に対する建議書を書いたという有名な話が残っています。

何といつても根釧パイロット事業、あるいはその後の新酪農村の建設というものに力を入れました。

我々が学生のころの話ですが、こんな話を聞いたことがあります。自分は農林大臣にも推薦されたけれど、発疹チフスでやれない、また協同党の世話人でもあつたことから断つた。ひよつとしたら総理大臣になつていたかもしれない。そのまま政治を続けていければ、青函トンネルくらいは少し早く出来ていたかもしれないが、しかしこれは一生の仕事ではない。だから何の悔いもない、と。

それ以来、政治の道には直接関与することはなく、教育と寒地農業の確立に専念した。あのまま政治に足を突っ込んでいれば、酪農学園も雪印乳業も無かつたかもしれない。何が幸いするかわからない、こういう話をされたことが思い出されます。

一しゃ千里でしたが、西蔵翁の生涯の大部分は、北海道の寒地農業の確立、酪農によつ

て冷害を克服するというデンマークに倣<sup>なら</sup>う運動、それを実際に担<sup>お</sup>う青年教育に全力を尽くして九六歳の生涯を終えた。少し長くなりましたが、酉蔵翁という人をあまり知らない人のために若干時間をとりました。

次に本題の、酉蔵翁の農哲学・農思想といったものを紹介します。

## 国家の興隆

まず第一に、昭和一八年ごろの講演録ですが、「健土國策と有畜機械農業」という講演の冊子が出てきましたので、これを整理しました。

国家の興隆、国が栄えていくとはどういうことか、を論じています。日本国の永遠不朽の繁栄は、いったい何によってもたらされるか、これは民族の持っている思想と民族が持っている国土が立派

## 国家の興隆

『健土國策と有畜機械農業』（1943年）

- ① 日本国の永遠無窮の繁栄
  - 民族の持つ思想
  - 民族を育む国土
- ② 健土國策と健全な食糧自給
  - 土地改良の理念
  - 有畜農業の確立
  - 農民の「健農」精神





であれば、永久に日本の国は栄える。

民族が持つている思想とは何か。戦争が始まったばかりであります。これは当然皇道主義、天皇を中心として、国民が一致団結するという思想のもとで頑張れば大丈夫なのだ、この当時発言しています。これは日本のリーダーの思想と全く同じであつたわけです。

その後、日本が戦争に負けた時に、この天皇中心の国体を反省することになりますが、その時に西蔵翁はこのように言っています。「古い日本が滅びたのは、日本さえ良ければ他はどうでも良い、という誤れる道義に民族を駆り立て、神国、神の国日本という虚偽の道徳律を信奉し、実践したからに他ならない、これは間違いであつた」ということで、西蔵翁は、戦争中の思想は間違えた方向に国民を誘導したものであり、戦後これを修正する、と言っています。

民族を育む国土、これは日本という国土は、他の国に比べると遥かに恵まれた自然優美な国土を持っている。この日本が持つている思想と、素晴らしい豊かな国土がある限りは、日本は永久に栄えると言っています。

そのためには何が必要であるかが、西蔵翁の言わんとするところでは、健全な健康な国土を創ることを国策として、健全な食糧を自給する。食糧の自給を非常に強調しています。

食糧を自給できない国は、いずれ滅びる。

日本は戦争に負けて、経済復興しなければならぬ。食糧を輸入していると、そのために金がかかり過ぎて、工業産業の発展を妨げる。ですから、食糧の自給は国の根幹なんだ、と言っております。

非常に面白いことを指摘しているのは、土地改良についてです。土地改良というのは、一般の人は、土地条件を整えて、収量を一割とか二割を増産する。そのために土地改良をする、と思っているけれども、それは違うのではないだろうか。もつと本質的に国土づくりというものを念頭に置くべきで、ただ目先の収量が増えたとか減ったとか、そういうことだけではだめですよ、と言っています。

国土保全という言葉も、「荒れないように維持する」という意味合いが強くて、積極性がない。前向きに国土を良くしていくという思想とは、少し違うのではないか」、とも指摘しています。

私はここで、非常に先見性のあることを紹介したいのです。この食糧のない時代に西藏翁は、ただ物の量が多ければいい、物を確保したからいい、ということではないのだ。食糧の質を考えなければだめだ。米にしても政府は、ただ量だけを確保することに死に物狂

いになっている。だけれどもそれは違うと。

栄養分とか質とか、そういうものに着目した政策を展開していかなければだめだ。これは私も、食管法の仕事をしましたけれども、戦争が終わって三〇年も四〇年も、米はどこで穫れても同じ値段。米の検査は形状検査で、品質や食味の検査ではありません、ということ長い期間やってきました。それを西蔵翁は、昭和一七年ごろに政策として間違っていると指摘しているのです。

そして、健土、健康な国土を創ることを国策としなさいということは、有畜農業、日本の農業政策は穀物主体主義で、国土を良くするという政策には程遠いものがある。家畜を飼うという農業に転換していかなければだめだ、ということです。

そして何よりも健土をつくる基本は農業だ。であるから健康な農業を創るための農民の精神を大事にしなければだめだ。こういうことを言っております。



## 日本の農業はどうあるべきか

日本の農業はどうあるべきか、という論考があります。

西蔵翁は、酪農義塾、酪農学園の職員なり、道庁の職員などをデンマークに派遣して、勉強させるとともに、デンマークの農家を二戸、ドイツの農家を一戸、家族ごと北海道に呼んでいます。これは自分のお金ではなく道庁のお金です。

そういう仕掛けを知事に提案して、農業経営を上演させた。それぐらいやりましたが、自分はデンマークを見ていない。教員や指導員を派遣したけれども自分が行っていないので、戦後の第一番の仕事として、デンマークに約一か月間滞在して隅々まで視察した。

その視察旅行記「農業國デンマーク」がありません。酪農学園で復刻版を出しております。その中でデンマークの歴史を見れば、協同の精神、相互理解の精神、強い信仰心と農民教育の徹底。これが一時滅びかけたデンマークを復興させた基なのだというところに、改めて自分の

## 日本の農業はどうあるべきか

『農業國デンマーク』（1952年）

- ① デンマーク興国の歴史に学べ
  - 相互理解と自助の精神
  - 強い信仰と農民教育
- ② 戦後日本の復興
  - 国家再建と食糧独立
  - 家畜増産への政策転換
  - 国民食生活の質的改善
  - 適地酪農と農業教育の刷新



デンマークの訪問先農家で（中央西蔵翁）

足や目で確認した。

デンマークには泥棒がない。駅のホームにカメラを置いておいても、だれも盗む人はいない。留学生から聞いていたそんな話にも、納得するわけです。視察記の締めくくりとして、それではこれからの日本はどうすればいいのか、日本の農業はどうあるべきか、を論考しています。

その一つは国家再建と食糧の独立。先ほども申し上げたように、食糧を独立させる、自給することが国家再建の基であることを改めて強調しています。食糧を自前できない国家は、いずれ滅びるということです。

そのためには、家畜を増産する政策に転換していくことが緊要である。国は、米・麦・豆を中心とした振興策を作っている。だけれどもそれではだめで、家畜を媒体とする農政を展開するという方向にしていかなければならない。

そして、この戦後の混乱の最中にもかかわらず、国民の食生活の質的改善を強調しています。農業教育の歴史を研究している者の論文のなかに、世相混迷の時代にも関わらず、食生活の質的改善が必要だとの西蔵翁の提言について、その先見性は並大抵のものではない、ということを指摘しております。

そして、地域の条件に合った適地酪農を導入していく。それは北海道も岩手県も本州も、それぞれの立地条件、どういう所にどういう酪農が向くかをきめ細かく提言しております。何よりも農業教育の刷新です。これまでのわが国の農業教育、農業学校の教育は、本当の意味の農民を育てていないのだ、ということを繰り返して、「農民に寄生する者を育てる教育はあるけれども、しかし農民を育てる教育はない」、これは私が非常に気に入っている言葉で、東京農大の創立者、横井時敬の戒めである「農学栄えて、農業滅ぶ」と全く同じです。



## 国敗れて山河あり

はじめのところで簡単に申し上げましたが、酪連の組合組織が公社になって終戦を迎えます。公

## 国敗れて山河あり

『黒澤・佐藤・瀬尾先生講演録』（1976年）

- ① 「機」は再び来たらず  
一機を知るは農の始めにして終わりなり
- ② 天機の捕捉  
一農民の心—「天の機」「地の機」
- ③ 準備と努力と希望  
一至誠天に通ず
- ④ 三人の偉人  
一リンカーン・グルンドヴィ・二宮尊徳



興産公社社長「補託して福」  
（1946年）

社になるということは、組合が発展的に解消して、北海道の乳業メーカー、あるいは道庁も一緒になって公社というものを創っていくわけですが、その時の社長が西蔵翁で、ちょうど戦争に負けた直後でした。

その時に、二週間にわたって公社の社員を講堂に集めて、一二日間連続して講話をした記録が残されています。そのなかの一つに「国敗れて山河あり」というタイトルがありまして、「機」という字を説明しています。

これはどういふことかというところ、酪農学園に機農高等学校というのがありました。戦前は野幌機農学校、戦後、学制の改革で野幌機農高等学校になりましたけれど、その時の「機農」という言葉は、機云の「機」に農業の「農」を付けて、機農学校という校名にした。

文部省に出向き、私はこういう学校を創りたいということを、とくとくと弁舌さわやかに言ったところ、文部省の高官は非常に気に入って、「ぜひ、黒澤さんそれをやって下さい」となり、申請から僅か一週間で機農学校（甲種農学校）の認可が下りました。

こういう離れ業をやって、当然準備も不十分のまま学校の認可が下りた。その時に、文部省からは、「変な名前を付けなくても、普通の農業高校でいいのじゃないですか」と何回も言われたそうです。だが西蔵翁は、断固として貫きました。

ところが生徒を送り込んでいる親たちは、機農というのは機械化、トラクターの機械の農業だと、だから近代機械の練習をして修得させてくれる学校だと思ひ違いをして、文句を言いに来たということが、笑い話として残っています。

西蔵翁は、「トラクターの機械ではありません。チャンス・機微・タイミングを意味する。農業にはタイミングが必要である。機会を逃したらだめなんだ、ということをお教えしたいのだ。これは何も農業ばかりではない。人生においても日々努力して、チャンスをおぼえ、心がまえが大切だ、ということをお教えしたいのだ」と言っておりました、「天の機、地の機」をうまく掴みなさい、ということです。

チャンス、タイミングをおぼえためには何が必要か。ぼんやりしてはダメ。準備と努力と、その上に希望を持つて事に当たらなければダメなんだと。農業というならば、種を蒔く時期、除草する時期、葉をかける時期、そのタイミングを逃してはならない。

人生も農業と同じなのだ、ということをおぼえ、生徒に、何事にも周到な準備と周到な努力と、そして目的と希望を持つて、事に当たりなさいと教えています。「機を知るは農の始めにして終りなり」の名言を遺しています。

西蔵翁は、自分が尊敬している三人の偉人についても講話しています。まず民主主義を



実践したリンカーン、次にデンマーク復興の父、グルンドヴィ。興国の父といわれているこの老牧師の精神に学ばなければダメだ。

そして、二宮尊徳は報徳思想を普及した有名な人ですが、西蔵翁もこの報徳思想を北海道中に広げるといふ運動もやり、質素・勤勉・節約、儉約・誠実に人生を送りなさいとの教えを広め、道内に酪連の報徳社の支部をつくるなど、精神の涵養に努めています。



## 寒地農業の確立

西蔵翁の頭に終世あつたのは、北海道農業を冷害から救うということでした。本州から移住してきた人たちが、土地の条件も考えないで、本州のものまねをする。あるいは米作りに憧れる。そう

### 寒地農業の確立

『北海道を乳と蜜の流るる里に』（1967年）

- ① なぜ私は訴えるか  
— 冷害のないデンマークへ
- ② 水稲への執念と戦う酪農
- ③ 適地適作と乳肉生産
- ④ 日本の食糧基地に  
— 「農業地図」を作れ



いう農業ばかりやっているから、北海道は冷害に悩まされている。

この冷害を何とかしなければならぬ。これが私の任務だ、ということでした。昭和四〇年前後に北海道は相次ぐ冷害に見舞われます。その時に写真にもありますように、佐藤栄作総理大臣、松野頼三農林大臣が冷害視察に来ました。

それを聞きつけた西蔵翁は、ちよつと待つてくれ、と直談判して予定を変更させた。冷害にあった稲作地帯ばかり見ないで、ぜひ酪農地帯を見てくれと。そして遠浅（安平町）の酪農地帯に案内しました。

昔はイモ部落といわれて、周りの農家から馬鹿にされた部落であった。だけれども今は、立派な酪農経営を実現させて、冷害のレの字もありません。これが北海道農業の在り方なのだ、ということをとくとくと説明して、水稲へ執着することへの猛反省を求めた。そして酪農の定着を進言するわけです。



佐藤栄作総理に循環農法論を説く西蔵翁

適地適作という言葉も、酉蔵翁の造語のようです。他の人はまだ使っていないようです。そして、適地適作と乳肉生産。穀物にこだわり過ぎた農業ではダメだ、ということですよ。

北海道を日本の食糧基地にする取り組みが必要で、地帯別の農業地図を作れ。北海道のそれぞれの地域に合った営農類型を作って、それに合わせた政策誘導、地域農政を展開していかなければならないと、提案しています。

そして今までの農業政策は、平等の原則で、みんなに行き渡るような資金政策をやっていた。それでは効果がない。本当にやる気のある経営者を捕まえて、それに重点的に資金対策を手当てすることが大事だ、と提言しています。

今日の主催者にゴマをするわけではありませんが、地域農業研究所が発行している会報「地域と農業」八七号に、黒河所長が「これからの北海道における農業経営の方向について」という論文を載せています。そのなかに、全く今の話と同じことを提案しています。

規模拡大の方向もいはいけれども、しかしそれだけではこれからの北海道農業は、ダメではないだろうか。地域の特性を十分に踏まえて、地域に合った多様な経営モデルを提示して、それを参考にして、個々の農家が経営改善に取り組むことが大事ではないか、と提言しております。

私は青森県時代に同じことをやってきましたので、ただ読み過ごすのではなくて、農協あるいは市町村が中心になって、北海道の地帯別にどういう農業に向かっていくべきなのか。本気になって取り組むことが必要ではないか、と思います。

## 農業の根本を知れ

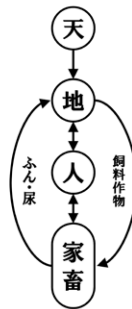
西蔵翁が繰り返し言っていることは、物事の根本、本質を知れ、ということです。農業をやっている人も、農業の本来の使命、本来のあるべき姿を理解してやっているのかというと、疑わしい点がある。

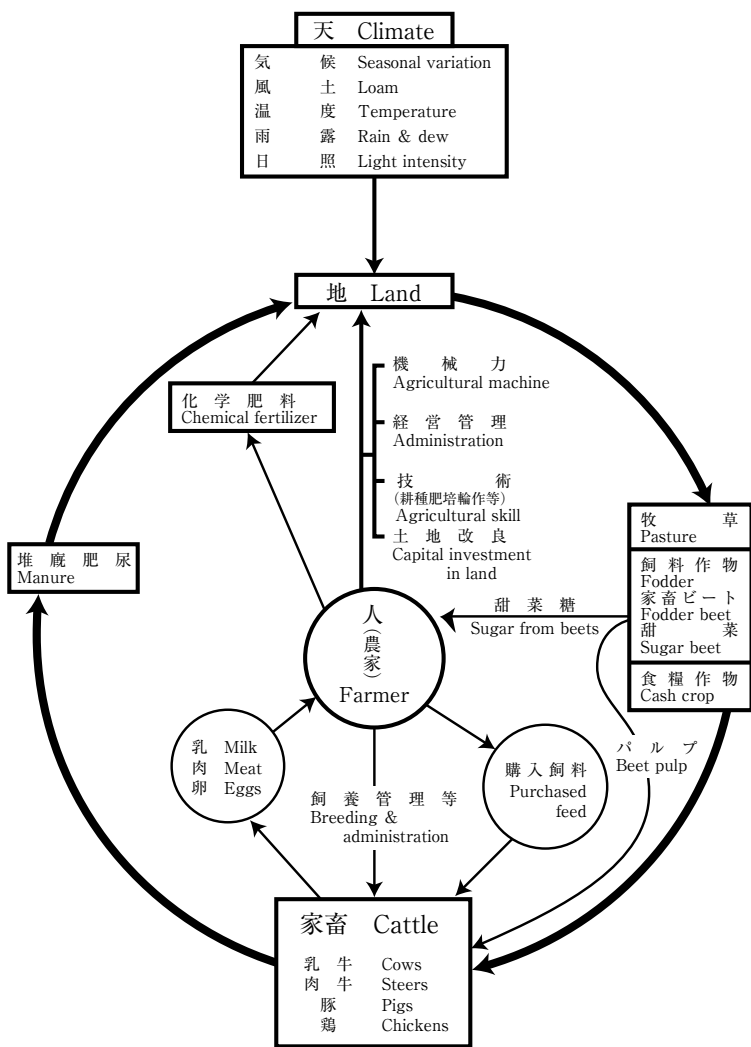
化学肥料万能の危険性なり、堆厩肥の大切さ、根釧原野や遠浅への酪農導入。そして国が進めている全国・画一の農業政策から脱却しなければな

### 農業の根本を知れ

『北海道を乳と蜜の流るる里に』（1967年）

- ① 天地の理を活用せよ
- ② 堆厩肥を大切に  
— 化学肥料万能は危険
- ③ 「根釧原野・遠浅」への酪農導入
- ④ 画一農政からの脱却





循環農法図

らないと言っています。

西蔵翁は、化学肥料に過度に偏った農法に、強い警鐘を鳴らしています。また、稲作に偏った全国画一農政については、「こと北海道に関しては百害あって、一利なし」と、断言しています。

西蔵翁の農哲学で有名なのが「循環農法論」です。

この循環農法図で何を言っているかというと、農業は、天・地・人の合作である。一番上に天、その自然条件が大地に作用して、真ん中にある人、農家が大地に働きかけて、牧草なり、主要作物なり、食糧を生産して、それを人なり家畜なりに与えて、その堆厩肥・ふん尿を大地に戻していく。こういうぐるぐる回るような農業でなければ、いずれ農業も国土も死んでいくのだ、ということなのです。

ここで余談になりますが、面白い指摘があります。シュガービート（甜菜）についてです。西蔵翁は、甜菜は飼料作物の一つで、本来飼料作物であるべきものだが、北海道の生産農家は家畜を飼っていない、と言っています。

つまり、パルプを牛に与えて、その汁を甘味として砂糖工場に送ることにならなければならぬのだが、甜菜を作る目的を間違えているのじゃないか、と言っています。面白い

ことを言うと思いました。

北海道の甜菜は、牛を飼っている農家を作るのは僅かで、大部分は単に畑作物として作り、甘味汁だけを目的としているから、始終価格交渉をやっているし、収量は諸外国に比べるところと低い。こういうところに、農業の根本的な間違いがあると、こんなことを言うております。

一律農政からの脱却については、私も非常に気に入って、青森県時代に大変参考にさせてもらいました。全国一律の農政を批判して、北海道に酪農を振興させようとした時に、農林省、国の役人は北海道の実情を理解していないということを、しきりに主張した人であります。



## 国土の尊厳と一律行政

「大正二年の大冷害が、自分にとって大変記憶に残るものであった」と述懐しております。大正二年の大凶作の時に、自分は足尾銅山の事件と同じだと、おもい知らされたという事です。「北海道の国づくりの土台になる農業と農民が、こんな惨めなことになるの

は一体どうしたわけか」と。

水田亡道論。水田を重視した農業政策であれば、業では、いずれ問題点にぶつかれることを繰り返して主張しています。そこでここで申し上げたいのは、国土の尊厳についてです。

大正二年の冷害と、足尾銅山の惨状には共通点がある。「国土の尊厳を犯すものは必ず滅びる」ということです。冷害も公害も人間が作り出したものであり、農政の転換を、寒地農業を確立するという前提で、酪農を中心とした有畜、家畜を導入するという政策転換をしない限り、北海道の冷害はなくならない、ということですよ。

全国一律農政への警鐘につきましては、先程も触れましたが、「地域開発の性格は千差万別」である。「中央の官僚は北海道の実情を理解して

北海道は滅びる。本州のものまねの農

## 国土の尊厳

『北海道開発回顧録』（1975年）

- ① 記憶に残る出来事
  - 大正2年の空前絶後の大凶作
  - 足尾鉍毒事件の惨状
- ② 二つの出来事の共通点
  - 「国土の尊厳」を犯すものは滅びる
  - 冷害も公害も人間が作り出したもの
  - 農政の転機—寒地農業の確立
  - 水田亡道論—本州模倣からの脱却農政



ない」と憤慨しております。

このような悲惨な体験からも、西蔵翁は、遠回りではあるが、地域農業の発展を担う農民教育の重要性の想いを一層強くします。

酪農学園の教育について、戦後キリスト教農業大学を創ることまで取り組むのですが、なかなか認められない。何も設備がなくては、大学の認可が下りないということで、その後二転三転しながら、今日の酪農学園を創った。

「真の実践農業青年の教育」をねらいに、文部省の認可を得ず、三年制の季節制短期大学を創り、一〇年近くも経ってから、文部省にばれるという騒ぎも起こしています。本当に「農業をやれる」人間を創ることに拘こだわったのです。

どうしたら、デンマークのような農業教育が出来るのか、ということであれもやるこれ

## 全国一律行政

『北海道開発回顧録』（1975年）

- ① 恐ろしい官僚の「全国一律行政」の発想  
— 地域開発の性格は千差万別
- ② 「実地と学問」の併用教育  
— 戦後の酪農大学構想
- ③ 堆厩肥で健土を  
— 三劣悪土壌の改良



もやりますが、でもなかなか上手くないかない。三年制の短期大学からは、優秀な人材が輩出されています。「実践と学問」との併用教育の試みでした。

西蔵翁は、北海道農業にとつての三劣悪土壌の改良にも努力しました。酪農学園には、大きな農場が三か所あります。一つは重粘土地、一つは泥炭地、一つは火山灰地です。この三つの劣悪土壌を、酪農の堆厩肥によつて改善し、立派な農地にしていくという目的で、実験・実証農場を運営しました。

それが酪農学園で持つてている農場の目的です。今はそこまでの取り組みはないですが。



### 三健論「健土・健民・健産」

時間が来てしまいました。これだけは説明しておきます。

化学肥料偏重の怖さについては、繰り返し触れましたが、国土を汚染している新農法について、「国土は国民の母体であつて、健全な国土からは健全なる国民が生まれるし、不健全な国家からは不健全な国民が生まれる。国土を汚染毒化することは、国民を知らず知らずの間に滅亡におとし入れる重大な罪悪といわねばならぬ」、と言つております。

そこで、「健土・健民・健産」ということです。

私は学生に「健土健民」を説明する時にこれを説明しています。個人レベルでの健康とは何かというと、第一に心の健康である。それから肉体の健康。財、すなわち家計経済の健康だ、と。心の健康と肉体の健康と家計の健康が揃って、初めて健全な社会人としての生活が出来る。

これを国家に置き換えると、心は国民、肉体は国土、財は産業。順序は少し逆になっていますが、語呂を合わせるために逆にした、と西蔵翁は言っております。そして、健産、健康な産業の基は農業である。

ゆえにそれを担う農業人の育成が大切だ、よつてもつて酪農学園を創つたのだ。このような三段論法になるわけでございます。

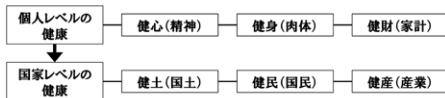
ご存知の方が多いと思いますが、石黒忠篤という、戦前・戦中・戦後の日本農政の陣頭

## 三健論と「健土健民」

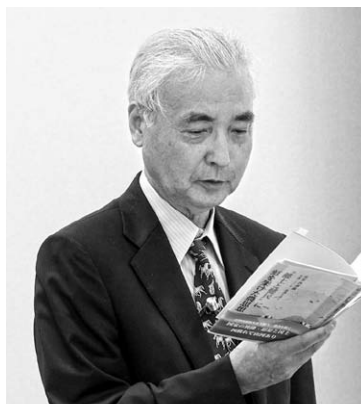
『健やかなる土』（1989年）

- ① 私の健康論—健土・健民・健産
- ② 化学偏向農法の怖さ
- ③ 国土汚染の新農法

国民を知らず知らずの間に滅亡に陥れる重大な罪  
悪を農業は続けている



健産(健康な産業)の基は農業である、ゆえにそれを担う農業人の育成が大切



指揮を執った人がおります。最初のところで、西蔵翁が国会の農林委員会で演説している写真を紹介しましたが、その当時の、政府側の実務立役者です。

石黒忠篤は、強い農本思想の持ち主でしたが、自身の農思想について、次のように言い遺しています。

「国家の基たらざる農業は一顧の価値もない」「食糧は国家独立の基礎条件である。それは戦争をするためではない。中立を厳守し、平和を守るためにも食糧の

自給なくしては、これを貫くことは出来ない。食糧が十分なことは、一家にとつても、一国にとつても独立と平和の基礎である。いや実に世界平和の根本条件である、と私は確信する」。

そして、石黒忠篤のゴールは、やはり健全な精神を持った実践農民の育成でした。最初に触れた農民道場を全国に設置させたのも、石黒忠篤であります。

西蔵翁の前後にこういう人もいて、思想的にも合致するなかで、戦前・戦中・戦後の混乱を乗り越えて、今日に至っているということ、参考までに紹介しました。

与えられた時間がここまででしたので、詳しくは拙著をお持ち帰りいただきまして、ご一読いただき、改めて西蔵翁の遺訓を、それぞれの胸に刻んでいただければと存じます。ご清聴ありがとうございました。

(加筆)

- ・編著者 仙北 富志和(学校法人酪農学園 学園長)
- ・体裁 四六判 二五九ページ
- ・問い合わせ 学校法人酪農学園 学園広報室

(TEL 〇一一三三八八―四一五八)



# 追記

(一)

## 今こそ生きる“健土と健民”の農思想

(仙北 富志和)

今年(二〇一五年)は、酪農学園の創立者、黒澤西蔵翁の生誕一三〇年の節目の年である。西蔵翁は、若くして田中正造の足尾鉍毒から農民を救う運動に身を挺し、その運命的な出会いから得た「国土の尊厳と人類愛」の教えを、酪農を基本とする寒地農業の確立とそれを担う青年の育成に転化し、開花させた。その行動と先見性は、今に生きる我々に、生き生きとした示唆を与えている。自励奮闘の糧としたい。

―信念のないところに実践なく、実践のないところに信念はない―



## 民族の興隆と「事」の本質

西蔵翁は、民族の發展興隆の基本は、その民族が共有している思想と、その民族が拠りどころとする国土にあるとしている。普遍の真理を希求する思想を抱き、健全優美な国土に育まれていることが民族繁栄の基だ、としている。「立派な民族は立派な国土を造るし、立派な国土は立派な民族を生む」。

したがって、国がなにもまして優先すべき政策は、「健土づくり」だと断言する。ならばどうやって「健土」を造りだすか。その使命は農業が担っており、その本質を体得している農業人の育成こそが最重要である、と説いている。

西蔵翁は、第二次大戦のまっただ中であって、「この緊急時に国家に貢献すべきことは食糧の増産」であるとしながらも、「不健全な土壌から出来た作物は決して健全ではない。米にしても麦にしても、数量だけがやかましいだけで、その成分については少しも研究していない。粒が揃っているとか、粒が大きいといった見かけだけで等級を決めているだけである。土地ごとの米なり、麦なり、野菜なりの内容ごとにその質を分析することになれば、土地ごとの生産物の価値は全く違ったものになる」と先見し、食糧の国内自給の大切

さを強調している。

戦時下にあつて、国民の主食である米などの強制供出のための食糧管理法を制定し、量の確保に血眼になつていた当時の国策に対する強烈な指摘である。米の食味に注目した施策（主流流通米制度）が導入されたのは、戦後三〇年も過ぎてのことである。

また西蔵翁は、農業者自身も農業の本質、使命を理解していない面があるとして、「なにゆえに家畜が必要であるか」と問いかけている。「乳を搾るから、肉を生産するから、というのは結果であつて、根本的な目的ではない。家畜を飼う目的は、農業そのものを成り立たせるためである。家畜がなければ農業は滅びていく。堆厩肥があつてこそ土地の健康が保たれる」。農業の使命への警鐘である。

西蔵翁の、農業は「天・地・人の合作」であるとする循環農法論のなかで、興味深い指摘がある。それは「甜菜 (Sugar beet) は本来飼料作物である。つまりパルプをとり、こ



信念みなぎる西蔵翁 (1967年頃)



れを家畜に与える。汁だけが甘味として砂糖工場に送られる。これが本質である。ところが北海道の甜菜の大部分は牛を飼っていない農家がつくっている。こういうところに農業の根本的な間違いがある。物事はすべてその本質を忘れてはならない」というものである。昨今、TPP問題とも絡めて、攻めの農政とか、農産物の輸出戦略など「儲ける農業」への政策展開が吹きまくっている。農業の本質や農業者の誇りといったものを考えるゆとりもなくなったとすれば、やるせない。「心を忘れた経済政策に永遠性はない」、西臧翁の叫びである。

西臧翁の願いは、健全な国土を造り、そこから健全な食糧を生産し、健全な国民を育む、という農業の実現であり、それを実践し得る農業者の育成である。

「健土を実現するのが農民精神だと思う。農民が本当に農業を天職として、民族の永遠の生命、永遠の興隆を図る基礎産業であるとの信念で、一生懸命工夫努力するのが農民精神である。それ以外に農民精神はありません。健土の確立は健農でなければならぬ。健土によって健農も生まれる」。



## 教育モデルと感化力

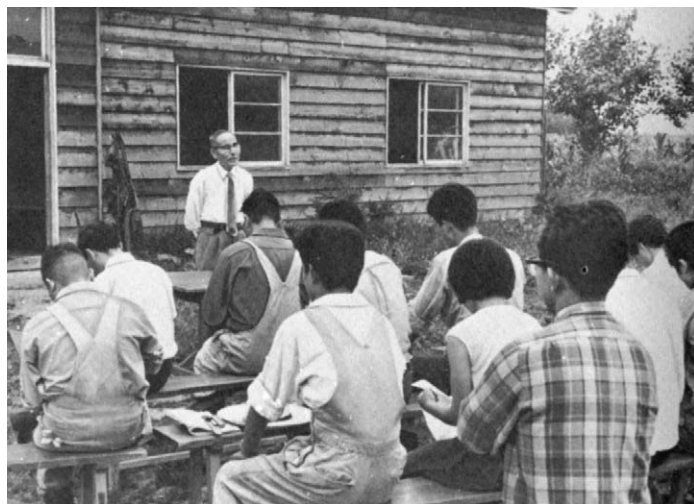
九〇歳を過ぎてなお現役の医師として、マスコミにもしばしば登場する日野原重明先生（聖路加国際病院）の著「長さではない命の豊かさ」（朝日文庫）に次のような一文がある。

「日本の教育を考える時に、モデルの大切さを痛感します。モデルたる教師の不足が、日本の教育の問題点ではないでしょうか。クラーク博士は札幌農学校の教頭でした。新渡戸稲造や内村鑑三など、後に歴史に名を残す若者たちがわざわざクラーク博士の元に集まったのです。しかも驚くのは、博士が在籍したのはわずか八か月ほど。新渡戸や内村は二期生ですから博士とは直接接した時間はなかったのです。それでも、博士の教えを直接受けた一期生が二期生に教え、二期生が三期生を、というように生きた学問が先輩から後輩へと受け継がれていきました」「モデルとなる人物の存在がいかに大事か、このことからわかるでしょう。教育的環境を整えるということは、単に校舎やキャンパスを整えるということではありません。感化力のある人材こそ、最重要であることを今の教育畑の人に知ってもらいたいです。この先生の授業を聞きたい、という魅力的な先生も少ないのです」。

実のところ、私も十数年前、役人生活を早々に切り上げて、酪農学園大学の教壇に立つことが許されたが、頭から離れなかったのが「感化力」であった。日野原先生のご指摘に、特に共感を覚えたのは、西蔵翁も全く同じことを遺訓とし、残していることである。

西蔵翁は、戦中・戦後の混乱のなかで、「遠回りのように思われるかもしれないが、無知な農民の教育こそが日本農業発展の基である」との信念で、理想の教育像を追い求めて苦闘した。

西蔵翁は、「教育にはクラークのような大人物が必要である」として、「教育に必要なのは精神、魂です。設備ももちろん大



「真の農村青年教育」を説く西蔵翁（1964年）

切ですが、それよりも大切なのは、建学の精神です。札幌農学校を例にとるまでもなく、校舎とか設備が粗末な時期に幾多有為な人材が出ています」と、と回顧している。

酪農義塾から始まった酪農学園が、大学の開設にこぎつけたのが一九六一年。戦後の混乱も落ち着き、日本が高度経済成長の坂を上り始めようとしていた時である。学園は「真の農民教育の理想」を求めて、全寮制の野幌機農高等学校の充実や短期大学・通信教育課程などを創設したが、デンマークの教育モデルには文部省（当時）の壁もあり、理想とする学校づくりに苦闘した。

だが、西蔵翁は、日本の農業・酪農を発展させるためには、より高度な教育研究機関の必要性を想い、長い問心に秘めていた「大学」の創設を提案する。居並ぶ理事諸侯を啞然とさせる先見力、信念だけからのスタートであった。

古材にペンキを塗った建物が点々とあり、肌寒い石狩平野はホームシックを煽るには十分。機農高校の講堂を借りての入学式での西蔵翁の一喝は、無目的な私の胸を揺さぶるものがあった。眼光鋭く式場を見渡してから、「諸君のうちには他の学校を落第して、いたし方なくて来た人もいるでしょう。しかし、来た以上は信念をもってやって欲しい」と迫り、学園の使命を熱く語ったのだ。

「農業が貧困であるということは、農業そのものが本質的に貧困であるがためではありません。科学の力と農民の努力があれば、まだまだ発展する余地は大いにあります。酪農学園の使命は、農業の質を改善向上させることにあります」。熱を帯びた弁舌は、理想を求めてやまない気迫であった。私の人生を導いてくれた感化力を改めて思う。

日野原先生は言う：「教壇の上からシャワーで水を注ぎ込むような講義を中心とする教育の仕方には、早く別れを告げてもらいたいです」と。

「教育とは学校で習ったことをすべて忘れた後に残るもの」とは先人の名言。酪農学園の学びから得たものは、まさに「後に残った」ものではないだろうか。

健健  
民土

昭和五十二年初志  
九十五箱 島海堂

☆諸君

人間というものは理想がなければ、

こんなつまらないものはありません。

一つの理念、一つの目標、理想というものを描いて、

なんとかこれに到達しようとする事、

これが生きがいのある人生ではありませんまいか。

(西藏)

(酪農学園後援会会報 第一〇八号より)

# 追記 (二)

## 国土の汚染

国土は国民の母体であつて、健全なる国土からは健全なる国民が生まれ、不健全なる国土からは不健全なる国民が生まれる。国土を汚染、毒化することは、国民を知らず知らずの間に滅亡におとし入れる重大なる罪悪と言わねばならぬ。

国土の清浄化、健全運動こそすべてに先んじてなさねばならぬ緊急事ではあるまいか。私は数十年來、健土健民を主張しているが、今やさらに声を大にして叫ばねばならぬ。

## 身、心の汚染

身体の汚染も困るが、さらに心配なのは心の汚染である。かりに身体が汚染されても、心だけは清浄無垢でありたい。心が汚染されれば、その極は恥を知らぬ人間になる。心が

清ければ少しの汚れでも気にかかるものである。

清廉潔白な人は、安眠もできて心身ともに健やかである。われわれはこの世に生を享けた以上、その日その日を大切に、できるだけ長生きして、社会のために幾分なりとも貢献するのが人間の務めではあるまいか。



## 満足と希望

幸福は満足する人に集まり、不平不満の人からは逃げ去る。不平不満は感謝することを忘れた人に生まれる。毎日を感じて送るから満足する。満足するから明日の希望が生まれる。これが本当の人生である。不平不満だけを並べてついには生活の希望を失い、自暴自棄に陥り、あたり一生を棒にふる気の毒な人を見受ける。この病原は感謝する、ありがたいという人間の良識を忘れ、驕慢（きょうまん）（おごりえらぶる）菌に侵されているからである。



## 一つになる代価

日本の過去をみても、数千年かかって明治維新の大業を迎え、ようやく一つの日本国ができた。この間、日本人同士があい争って、数知れぬ人命を殺傷し、目覚め、そして一つになったのである。

世界の百数十か国が一つになるには何年かかるか、どれだけの人命が失われるか、神様以外にはわかるまい。しかし世界は必ず一つの協同体になる運命を有している。これが天地自然の大法則であろう。あちこちの紛争は一つになる代償だろうか。



世界連邦「世界は一つ」を訴える西蔵翁  
(1971年)

(黒澤西蔵著「反芻自戒」より)

患難生忍耐  
忍耐生鍊達  
鍊達生希望

昭和三十三年六月十七日  
黑浮西花  
七年三月

★講演者略歴

仙北 富志和 (せんぼく としかず)

- ・1941年7月 北海道増毛町生まれ
  - ・1964年3月 酪農学園大学酪農学部卒業
  - ・2001年4月 青森県農林部長を辞して酪農学園大学に転職
  - ・2013年2月 (財)酪農育英会理事長 (同年4月 公財)
  - ・2013年6月 学校法人酪農学園 学園長
- 

- ・出版協力
  - ・講演録提供 一般社団法人 北海道地域農業研究所  
(専務理事 大坂 雅博)
  - ・写真提供 学校法人酪農学園 学園広報室 (課長 江口 祐子)
- ・発行日 2015年9月1日
- ・印刷・製本 社会福祉法人 北海道リハビリー  
〒061-1195 北海道北広島市西の里507番地1  
TEL 011-375-2116
- ・発行者 仙北 富志和



乳と蜜の流るる里に・冷害克服

田中正造全集を編む・文字の記念碑

反芻自戒・健土から健民を